福井県民の将来ビジョン 分野別意見交換会 意見概要

（福祉・医療）

〇福井県はつながり（地縁）が強いと言われるが、実態が見えにくい。タテのネットワークだけでなく、ヨコのネットワークを作っていく必要がある。

〇鹿屋市（鹿児島県）柳谷地区では、地区をあげて休耕田にさつまいもを栽培し、焼酎づくりに、その売上で、イチロー（当時オリックス）の試合を観に行くという目標をたてて取組んだ。感動をどう分かちあうかが大事であり、つながりを実感できる仕掛けが必要である。

〇福井市の国見地区では、地区内に４１２世帯・１，３００人が住んでおり、高齢化率は３８％である。高齢者のデータベースを作成し、特に災害時、誰が誰を救助するのかなどを決めている。

〇地域における問題点は３つある。

１．人…人口減少により、１人が地域の役を何役も兼務している。団体からの役を統合するなど事業仕分けが必要

２．お金…補助金の使途が決められている。地域の現状に応じて使えるようにして欲しい。

３．モノ…活動の拠点が無い。経費節減のため、地域に配布するチラシを手作りするために、プリンタを共同購入したが、公民館に置くのもままならない。

〇小規模多機能とは認知症対策の施設で、中には食事を持っていくだけ、声掛けだけのサービスを行っているところもある。老人が小中学生と接する機会があればいいと思う。

〇業務を行っていくうえでは、ヨコの連携、医療との連携をどう進めるか。また、キーパーソンをどう育てていくかが課題である。

〇老人クラブは、市より郡部の方が、活動が活発である。

〇高齢者の独居世帯が増加している。また、高齢者の世話をする世代、４０～６０歳代の男性が無職、借金を抱えているケースがリーマンショック以降多くみられる。

〇地区の力、家族の力とも減退している印象を持つ。

〇福祉はヨコのつながりを求めているが、行政がタテ割りのままであることが問題である。タテ割り行政では、隙間を埋める福祉はできない。

〇身体障害者の全国大会へ行く際、公共交通の使用に対する助成があるとよい。

〇身体障害者に対する偏見がまだ残っている。学校教育から対応して欲しい。

〇知的障害者福祉窓口は市町であり、その役割は重要である。県の役割、市町の役割を明確にし、重層的に補う体制を整備して欲しい。

〇福祉は行政の中ではコストとして捉えられている。むしろ地場産業として捉えていただきたい。

〇福祉について専門的な知識、技術を持った人材の育成が進んでいない。福祉教育により将来の人材を育成して欲しい。
〇ひきこもり等精神障害者の対応は、早期に発見し、まず診察を受けることが重要である。
〇就労移項支援事業の２年間の期限を県独自に長くして欲しい。
〇国の体制が大きく揺らいでいる中で、県として福祉・医療にどう予算配分を考えていくかが大事。国の考えを超えてでも県として取組むのか判断が必要。
〇日本の中の高福祉県（デンマーク等に倣い）を目指すなど大きなビジョンをまず示すことが重要である。枝葉ばかり議論しても仕方がない。
〇歯科医療費が低い地域は、将来の医療費も安くすむというデータがある。８０２０運動を全国的に展開しているが、訪問診療により、将来要治療にならないための活動を行っていきたい。
〇県内に訪問看護ステーションは県内に５４カ所ある。これからの看護は個人が独立して行う形態が中心になっていくだろう。
〇県として、介護を施設で行うのか、在宅で行うのか、大きな方向性を示して欲しい。
〇高度化、専門化する医療に対し、大きなミスを犯さないために小さなことを確認するという方針で看護師育成を行っている。
〇今の若者は失敗を恐れるあまり、失敗体験が不足している。失敗を乗り越えて次に進める人材の育成が大事であると考える。
〇今飲んでいる薬の飲み方を間違えている患者がかなりいる。
〇福井県は三世代同居が多いというデータがあるが、その関係性は希薄になってきているように感じる。